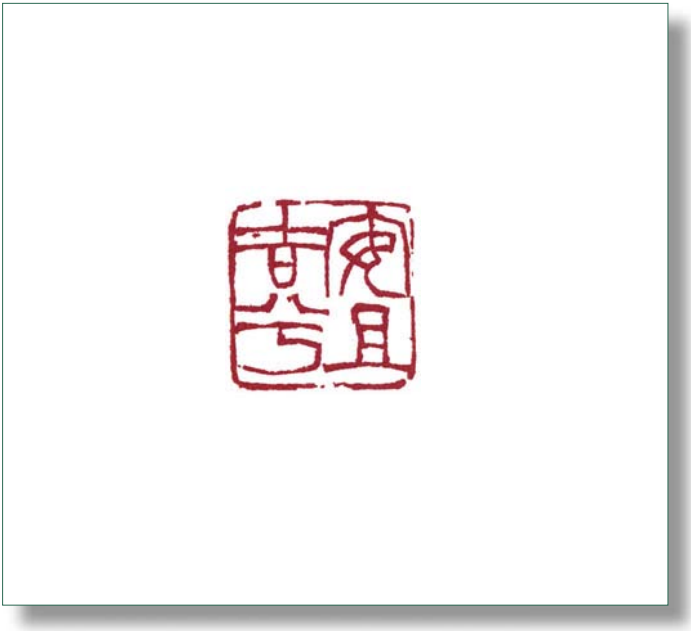
あさ 4

2009

鎌倉



安且吉兮　　保多孝三著『柞廬印存』(一) より

「詩経」の〈無衣〉の一章

豈曰無衣七分　　豈(あ)に衣(ころも)の七(しち)なる無(な)からんや

不如子之衣　　子(きみ)の衣(ころも)の

安且吉兮　　安(おだや)かにして且(か)つ吉(よろ)しきに如(し)かず

いやこっちにも七つ紋付の用意がないとはいいません。しかしやっぱりあなたさまから頂戴するべべの方が、穏当で結構でございます。〔何とかこんどの殿様に、天子さまからの正式の下されものとして、新しい地位にふさわしい制服をさしあげて下さいよ。〕《吉川幸次郎 注　岩波書店》

吉川注を読んでもよく分らないのは残念だが、前号印譜と違ひ伸びやかな線でゆつたりとした構成に好風を覚える。

あと

四　　月

春

うなさかは春の項と知りにけり
白浪は沖にあるはず春の海
紅梅や内面似菩薩外面如夜叉
桃畠枝くぐりゆく雲のおと
春愁やちいさく點す深海魚

新中野　佐藤喜孝

明日嫁ぐキュッと奥歯を二日灸
二日灸嫁ぎて耐えよと祖母の指
バレンタイン海の男にハートチョコ
バレンタイン大漁旗のいさみたつ
海鳴りの燈台岬受験生

町屋　藤野寿子

マスクしてわからずに亡夫がゐて

三月十日ビールの泡にしてしまふ

人妻の一と痩せしたる春の月

今も別れははくれんの開くとき

またの日のおほかたはなき桜かな

若松河田　堀内一郎

雛

憧れの五能線いま雪の中

料峭やリンゴクレープ焼きあがる

旅先の思ひ出雛と共に買ふ

打菓子の雛の色は桃色に

春の雪伯母の便りは変らずに

中井　森山のりこ

春の雨

翡翠は残影ばかり春の川
蛸壺の駅弁ずしり瀬戸霞む
鬼は外脚のすくすく伸び盛り
牡丹雪低く横切る四十雀
一膳の炊き立てご飯春の雨

落合　森　理和

寒の薔薇写されし胃をみつめをり
オレンジのバイク去りゆく冬の道
鳥翔ちてピラカンサの実消えてをり
交番の一輪挿や冬日さす
春ならひ街に並びしレッズの旗

東大宮　山荘慶子

文旦や思ひの外のかろさかな
白鳥徳利の首に指当つ雨水かな
歩ききて五臓を埋づむ春大気
黄砂花粉鼻の外から躙り入る
団栗をピテカントロプスめくひろふ

鍋屋横丁　吉弘恭子

流　人

医師訪ふ心おもたく落葉踏む
強霜や血色ほのかに甦る
冬没日流人のごとく病得し
病廊の聖樹にふれて月を見る
隣室もひそと相病む冬薔薇

中浦和　渡邉友七

椿はや日々掃くほどに薄日射す
ボサノバのコンサートあり建国日
切りわけるシフォンケーキや春の雪
わかさぎの小さき頭ほろ苦し
ころころと笑ひし頃の桜貝

清瀬　赤座典子

肉じやがのほつこり炊けて沈丁花
肉厚の益子の器沈丁花
沈丁花能面かすかに笑みてをり
行く春や昭和の色の理髪灯
囀やそっと出したる小座布団

曳舟　遠藤　実

逗子　鎌倉喜久恵

まっさきに春の寄せくる岬かな
朝食の豊か春眠さそひけり
よなぐもり沖のヨットの揺らぎをり
春の雨烈しき姿ときに見す
春の闇すくって見たし時折は

川崎・小田栄　木村茂登子

掌にのこる水玉たびら雪
日輪を聚め立春の鶴見川
立春の天眼鏡を磨き上ぐ
カニカマのこぼれ落ちたる恵方巻
白梅やほろ酔ひの身は壺中天

チューリップ象の花子に歯のひとつ
細長の卵うららか箱の中
うらうらと抱き締めをりぬモルモット
母にバイバイエレベーターのドア余寒
エスカレーター花粉マスクのすれ違ふ

京橋
篠田純子

火を埋めて人のぬくもり仄明り
間近まで来る寒鴉目の合ひぬ
さりげなき言葉の裏のあたたかし
春立つや大江戸線をひとめぐり
還暦の象の孤独よ春の日よ

千駄木
芝尚子

ふるさとへ

ふるさとへ絆たしかめ雪遠嶺
子に添はれふるさとの駅冬日和
冬の夜ユニットバスに窓はなく
宝仙寺インコが睦ぶ枯欅
見たくないもの見てしまふ余寒かな

中野坂上　芝宮須磨子

いつもさう

托鉢や深雪のポストかへりみる
町ぢゅうが布団干す日のひとつづつ
寝入るとき雪がふりゐきいつもさう
正午打つ時の冬日が石垣に
福は内なぞと貧乏してをりぬ

剱（つるぎ）地（ぢ）　定梶じょう

朝まだき山に向へば寒の月
山下りて風花受ける露天風呂
北の友臘梅未だ見ぬといふ
戸田の浜真正面に春の富士
西伊豆の達磨山にも春の雪

所沢　須賀敏子

足を舐め体を噛んで冬の猫
石臼の残る旧家の冬ぬくし
踏切のひねもす開き梅の花
草も木も枯れて阿蘇山眠りをり
はや許すことは云はずに林檎剥く

本町三　鈴木多枝子

吊りらむぷ

春隣灯すことなき吊りらむぷ
従三位の墓を仰げば冴返る
例会の日脚たしかに伸びてをり
二重廻しの黒き人々鉄道史
美声には遠くなりたる歌留多かな

浦和　竹内弘子

金糸魚（いとより）

恩寵や須臾枯芦の金色に
金糸魚を得て夕映の中歩く
海昏れぬ明日は黄砂くるといふ
二人で漕ぐふらここや白い波
縫ひぐるみの兎と話し春近し

田端　田中藤穂

犬

枯野道犬を抱へて立ち尽す
眠る山抱へる犬にまだ温み
犬埋めし枯野を包む夕日かな
手袋を握りしめたる五指の朱
炉辺に寄る母夫娘孫に吾

三光坂　東亜未

行事

やれやれとお茶を飲み干す年の豆
朝早き客は雀や鬼の豆
立春と言ふに若者には忍耐
初午や甘辛濃い目いなりずし
掘下げる工事におもふ蕗の薹

富田　長崎桂子

薄氷

縄文は海原なりし枯木山

薄氷や目高の機嫌うかがひぬ

ひよどりの来ぬ静けさよ寒戻る

水光る春をもとめて人の数

梅の花胡弓に踊りだす子供

大宮　早崎泰江

恭子　純子　茂登子　東亜未　敏子　須磨子　弘子　木枯　敦子　美代子　藤穂　寿子　喜久恵　典子　綾子　理和

2009年新年会(1/13) 高田馬場「ミンガラバー」にて

カラオケスナップ

一人一句

初夢か拳ほどいてやりにけり　佐藤喜孝

貝塚の枯木くまなく夕映ゆる　早崎泰江

福笑膝いたはりつのり出せり　藤野寿子

ばらばらな顔あつまりて梅ひらく　堀内一郎

何事もなきかの顔で福寿草　森山のりこ

薄氷の上に氷片飛散せり　森　理和

年新た小さき庭に夫と立つ　山荘慶子

ふるさとの薬缶鳴りをり寒紅梅　吉成美代子

徳利の尻をささへてお正月　吉弘恭子

冬ざれの路上に踏めり青葉くづ　赤座典子

出土せる大き土瓶や雪催　安部里子

美しく山河の光る初景色　王　岩

白梅や老斑かくすこともなし　遠藤　実

前月作品

海上に白き満月松七日　鎌倉喜久恵

冬空のかすかな色のさまざまに　木村茂登子

螺鈿の如き鰺捌きをり小正月　斉藤裕子

藪柑子ふいに心を打つ言葉　篠田純子

賀客あり饒舌のわれありにけり　芝　尚子

老いどちが頬桃色に明けの春　芝宮須磨子

雪女郎守衛の仮眠深くなり　定梶じょう

今年もねベランダからの初の富士　須賀敏子

父植ゑし山茶花垣も今はなし　鈴木多枝子

曲物のごとき光沢もて冬木かな　竹内弘子

木漏れ日のやうな付合ひ賀状くる　田中藤穂

喰積やをの子の好きは卵焼　東　亜　未

寒の内田畑の色はビニール色　長崎桂子

喜孝　抄

三月作品より

王岩・佐藤喜孝

四方の春ひとつ年とる一億人　佐藤喜孝

四方に広がる青海原の水平線より昇った初日影が日の本の国に向けて射し込んでくると、東・西・南・北、国中は新春の喜びに沸きたった。淑気あふれるこの元朝、一億の国民は皆健やかに一つ年齢を加えた。

二月号で、「日の本は白浪をもて縁どれり」と、日本国を愛しむように詠んだ作者は、また愛情をこめて新年を迎えた日本人を詠んだ。

硯海の面にひろごる初日かな　吉弘恭子

硯海、硯の海とも。硯の墨汁の溜まっているところ。元日の朝、書初めの為に硯を用意して、墨を磨り、艶やかな墨汁を作った。新年の抱負、書くべき文字をあれやこれや考えているうちに、初日影は窓越しに射し込み、硯の海に広がった。墨の香、初日の光、和やかでめでたい新春の雰囲気が醸し出される。

因みに、硯は紙・墨・筆とともに中国語では「文房四宝」と呼ばれ、魚脳凍・蕉葉白・石眼などといわれる美しい文様を持つ端渓硯は最も珍重される。

この庭にやうやく春の兆しあり　森山のりこ

長い冬の寒さを凌ぎ、とうとう春が訪れた。植木も芽吹き、小鳥も囀るようになった我が庭に春を見つけた喜びは、句中に漲る。春が待ち遠しいという気持ちを眼前の所見を通して表現している。

大寒や鼻先被ふ術知らず　森理和

大寒は二十四節気の一つで、太陽暦の一月二十日頃に当たる。一年の中で、一番寒い時期である。帽子やマフラーや手袋などによる防寒

装備を整えることができるが、しかし、顔の中央に隆起した鼻先は、寒風に曝されたままで凍えている。呼吸をつかさどる器官としての鼻が冷たい空気を吸う時の寒さが、感覚的に上手く表現された句である。

年新た小さき庭に夫と立つ　　山荘慶子

年の改まった早朝、長年連れ添ってきた夫君と自宅の庭に下り立つ作者。輝かしい初日影を浴びながら、その胸は今まで甘苦をともにしてきた夫君への感謝で一杯になったであろう。睦まやかに語らい、将来に向けて希望を新たに持つ夫婦像が鮮やかに浮かび上がる。

初富士や寒林梢を明るうす　　渡邊友七

富士山は霊峰と看做された日本の象徴である。古名は不二という。また漢詩の世界では、芙蓉峰、富嶽と呼ばれる。

江戸中期の秋山玉山は五絶で

帝掬崑崙雪、　帝　崑崙の雪を掬ひ
置之扶桑東。　之を扶桑の東に置く
突兀五千仞、　突兀たり　五千仞
芙蓉挿碧空。　芙蓉　碧空に挿む

と、天帝が崑崙山の雪を掬って、富士山を創ったのだと詠んだ。

江戸中期の詩僧の万庵原資は「補上人の西上を送る」という詩中で、富士山の雄姿を「青天八朶玉芙蓉」と表現した。この流れを受けて、江戸後期の柴野栗山は五律で富士山を荘麗に詠んだ。

誰将東海水、　誰か東海の水を将て
濯出玉芙蓉。　濯い出す　玉芙蓉
蟠地三州尽、　地に蟠まつて　三州尽き
挿天八葉重。　天に挿んで　八葉重なる
雲霞蒸大麓、　雲霞　大麓に蒸し
日月避中峰。　日月　中峰を避く
独立原無競、　独立　原　競ふ無し
自為衆嶽宗。　自ら衆嶽の宗と為る

掲句は、元朝の富士山を詠んだものである。初日影は富士山の姿を夜明け方の澄み切った空にくっきりと浮かび上がらせながら、少しずつその光を増していく。そして、富士山麓に広がる樹海の梢をうっすらと白く明るませていく。来日後、富士山の頂上まで一度登ったこともあれば、遠くから富士山を眺めたことも数度ある。また藤沢市の友人の家から富士山を眺望したこともある。あの美しい山容に心を打たれてすっかり魅了されてしまった。初富士も一度眺めたいものである。

スメタナの我が祖国聞く宵の年　　赤座典子

ベドルシハ・スメタナ（1824～1884）は「チェコの音楽の父」と呼ばれ、チェコ国民音楽を確立した作曲家である。その代表作は『我が祖国』で、1874年から1879年にかけて作曲された六つの曲（1ヴィシェフラド、2ヴルタヴァ、3シャールカ、4ボヘミアの森と草原から、5ターボル、6ブラニーク）から成る連作交響詩である。当時、スメタナの生れ育った祖国チェコは、隣のオーストリア帝国に占領され、母国語の使用を禁じられていた。スメタナはその祖国への熱い思いを作曲に託して、母国の美しい自然と伝説、長い歴史を音楽で表現し、オーストリア帝国の強い支配を受けていたチェコ国民を励ました。

掲句は大晦日、スメタナの『我が祖国』に聴き入る場面を描いている。作者は祖国日本への思いを抱いて、スメタナの『我が祖国』を大晦日に聞いていたであろう。いつか音楽をやっている中国人の友人の家で、『我が祖国』を一緒に聞いたことがある。

白梅や老斑かくすこともなし　　遠藤　実

春寒にめげずに梅の老木が白い花をつけて咲初めた。風霜に曝されてきた鉄骨のような樹幹は斑点に覆われ痛々しそうにみえる。しかし、樹冠の白い花はそれらを隠す気もなく咲き誇っている。ほのかに薫る白梅の清明を表現した、

寓意を秘めた句であろう。

百八つ煩悩祓ひ淑気かな　鎌倉喜久恵

煩悩とは仏教用語で、人間の心身を乱し悩ませ、智慧を妨げる迷いの心の働きを意味する。それは全部で百八種類あるという。大晦日に「除夜の鐘」を百八回突くのは、一切の衆生が抱えている百八煩悩を祓い清めるためである。

掲句は、この除夜の鐘の後、天地の間に満ち満ちているめでたい新年の気配を表現した。

打ち解けて新妻笑ふお正月　斎藤裕子

嫁いでから最初のお正月を迎えた新妻。新しい家族と談笑する様子。幸せな家庭がここにあり、これからも笑い声の絶えない毎日が続くであろう。

（以上　王岩）

ふるさとの薬缶鳴りをり寒紅梅　吉成美代子

大きな薬缶が薪ストーブの上にでも乗つてゐるのだらうか。〝ふるさと〟を薬缶の滾る音に収斂し、ふるさとをとらへてゐる。薬缶の蓋がカタカタ鳴ってゐるのだろうか。やすらぎの響きである。印象的に寒紅梅が咲いている。

冬空のかすかな色のさまざまに　木村茂登子

曇天であらうか。ひと色に見えたのだが凝視してゐる内にさまざまな色が現れてきた。茫洋とした大空を仔細に観察の成果である。空をこんなにゆつくり眺める至福の時でもある。

雪女郎守衛の仮眠深くなり　定梶じょう

雪女郎は難題だとおもふ。掲句の雪女郎は句中にただ置かれただけである。よく見る句は大半が雪女郎がだうしたこうしたといつてゐる。

夜更けであらう、守衛が仮眠を取る、眠りが深くなることに雪女郎は関係ないかも知れないが、関係がある。雪国の守衛の生活の一端を捉へて佳句を得た。

（以上　喜孝）

銀翼の裂く雲海や碧き空

プロペラ機沖縄本島春日浴ぶ

珊瑚礁隆起せし島春闌ける

のどけしや食堂の庭さばに舟

菜の花黄さとうきび畑ふちどりぬ

風光る民族村の古き甕

与論島

赤座典子

煌めける川無き島の春の海

白砂や素足無心の小半時

まっすぐに歩かぬ子供春の浜

壺焼や少し覚へし島言葉

黒糖焼酎いかほど飲めば島人（しまんちゅ）に

緋寒桜撮影会めく仲間どち

近世俳諧と漢詩文 2 拾八

王 岩

涅槃像ひまゆく駒も見ゆる也　　松窓 乙二

松窓乙二は宝暦五年（一七五五）～文政六年（一八二三）。本名は岩間清雄。庵号は松窓である。芭蕉・蕪村を畏敬し、『蕪村発句解』を著す。句集に『松窓乙二発句集』があり、問題の句はここに見える。

涅槃像は春季の季語で、釈尊が娑羅双樹の下で涅槃に入る時、頭は北、面は西、右脇下にして臥し、周囲に仏弟子や菩薩・諸天・鬼神・鳥獣などが泣き悲しむさまを描いた絵画。涅槃会に用いられる。

句中における「ひまゆく駒」は『荘子』「知北遊篇」の

人ノ天地ノ間ニ生クルハ、白駒ノ郤ヲ過グルガ如ク忽然タルノミ。

に出典する成語である。「郤」は隙と同じ。『荘子』「盗跖篇」にも「忽然タルコト麒驥ノ馳セテ隙ヲ過グル

ニ異ル無シ。」とある。

「白駒」は、白い馬のこと。「隙」は、すき間の孔。歳月の過ぎ去ること。また、人間の一生は、白い馬が壁の隙間の向こうを走り過ぎるのを、ちらっと見るごとく速く、また、短いものだという。人生の儚く短い譬え。シノニムには「隙駒」「隙の駒」「白駒隙を過ぐ」「隙過ぐる駒」などがある。「涅槃像」に「ひまゆく駒も見ゆる也」という中七下五を取り合わせたところに、意味深長な寓意が秘められるであろう。

乙二が生まれた宝暦五年よりほぼ百年早く明暦二年（一六五六）に刊行された『ゆめみ草』（蔭山休安編）の中には、編者休安の句が見える。

光陰のたつや隙行駒迎　　休　安

休安は談林派の俳人で、生没年未詳。本名は蔭山文明である。

「駒迎」は季語で、秋の駒牽きの時、諸国からの貢馬を官人が近江の逢坂関まで出迎えることを謂う。休安は「隙行く駒」と「駒迎え」を巧く掛けて、「光陰の立つや」―「隙行く駒」―「駒迎え」というふうに、句の流れを組み合わせた。言語上の遊びが見られる。

半掃庵也有著『蟻つか』の中にも下記の句がある

枯野に馬の駈る画

野は枯て隙行駒の猶早し　　也　有

也有は横井也有で、元禄十五年（一七〇二）～天明三年（一七八三）。別号に野有や蓼花巷や知雨亭や半掃庵や羅隠などがある。句題から分かるが、枯野を疾走する駿馬の図を前にして詠んだ句である。或いはその絵画の賛として詠まれたかもしれない。『荘子』に出典した「隙行く駒」という成語を巧く句中に組み合わせた、「枯野奔馬の図」に相応しい題賛であろう。

『成美発句集』の中にも「白駒過隙」という成語を句題に詠んだ句がある。

白駒過隙

年くれぬ上野の桜今の事　　成　美

休安・也有・成美・乙二は『荘子』に出典した「白駒過隙」という成語を詠み続けた。

松窓乙二

いつ旅も時雨さそはぬ事ぞなき
しら雲は遠いものなり菊の上
ともすれば菊の香寒し病み上り
春雨や木の間に見ゆる海のみち
夜は夜とて忘れぬ凧の置所
子を呼に出て子をつれて梅夕
海苔汲めば鴎来るなりちらほらと

病中吟

春の雨心はぬれて古郷へ
なぐさみや茅花あつめて枕にす
雀子や家のうしろは浅茅原
包まれてしづまる虻や白い紙
花散るやつぼつぼと鳴る水の奥
面買てくれて子は寐て春のくれ
龍宮でつく鐘の音歟五月雨
麻刈や水乞鳥を見て歸る
夕やけのさむるにはやし鵜川人
はなれ鵜の羽黒の山は日暮たり
鶯のうしろ見らるゝ暑かな
蕗の葉を引さいてみる暑かな
さびきつて碇のあつし砂の上
脛高くかゝげし人も風薫る
月さして歸るもありぬ墓参
親にのみ蚊屋つる家ぞ萩いそげ
我丈ケにあまりてさびし女郎花

古禅師の手向

芋あぶる烟につれて去(いな)れしな
蹠籟老人が山居を訪ふ
露寒し我足あとを又歸る
あきかぜや白き雀をけさもみる
名月や親の位牌を松の上
さむしろや秋の戸口の日南水
水音と鹿に又逢ふ山路かな
冬草やはしごかけ置岡の家
水鳥の嘴にかゝれり暮の波
朝茶のむうちは居よかし冬雀
寒空や筏にのせし鍋の跡

我をはじめとして

俳諧師梢の柿の蔕ばかり

あをかき集　堀内一郎選

（六人目以降五十音順）

新蕎麦をかために父の忌日なりし　鈴木多枝子
いわし雲路地にも昔なかりけり
秋ざくら駅長は即切符切り
太陽を知らないままに沈丁花
人の名を忘れてばかり寒明ける
体中輪切に写され寒晒　遠藤　実
飛び石の一つ小さく別れ霜
蕗の薹つつむ新聞株式欄
白梅や老斑天よりいたゞきし
雪形やふるさとの水に味があり

春一番心の隙間吹き抜ける　森山のりこ
リハビリの足元庇ひ菫踏む
身構へる心を揺らす桜草
幼き日きれぎれ浮ぶ春の夢
優しさは一言で足る胡蝶蘭
ベランダで爪切る人に木の芽風　赤座　典子
胃薬は苦くなけれど桜餅
水茎の跡弾けをり篝火花（シクラメン）
春のその奇抜さに戻りたし
あてのなき旅行情報春の雨
霜解道横切る猫のすばやさよ　早崎　泰江
図書館の窓辺明るし水仙花
梅林をしみなく枝剪られをり
梅林猿の腰掛そのままに
変りなく香り初めにし沈丁花

香に噎せて人浮かれゐる枝垂梅　長崎　桂子

観梅終へ饒舌の卓店占める

ガラス張り日差眩しく余寒なほ

車止め店へ駆け込む余寒かな

山笑ふ禅寺祈りと懺悔かな　藤野　寿子

若僧の菜飯のレシピ大擂こぎ

日脚伸ぶ代替りても早起き村

わが機影太平洋に菜飯食

寒星やポッケの中に手をつなぐ　森　理和

春花粉感度良好嚔哉

春立つやこまめにつける化粧水

知り抜きし路地へ子猫はまっしぐら

七草の箸を斜めに日渡る　吉弘　恭子

元朝や白髪にまじる霰かな

木枯や蒙古斑から生る話

十二月烏骨鶏の卵割る

夕鵙に打たるるばかり泥稻負ひ　渡邉　友七

身いっぱい泣いて熱噴く寒の赤児

休日のカーテン重し日を呼ぶ鵙

風花やけさよりすするまじり粥

春の旅クジラのベーコン求めけり

満開と言ふも梅林淋しかり　鎌倉喜久恵

切りもなく水輪ひろげる残り鴨

街空を悠々と舞ふ春の鳶

ワイパーにとろけるネオン春の雨　木村茂登子

自転車の屍累累春一番

御包のみどり児に似て座禅草

旨い汁みな大根におでんかな

ふり出して雪があたたか雪だるま　定梶じょう

寺町に零下の日々の石畳

雪無限ジャングル・ジムにふり頻る

寒晴や手渡しされて柩出づ

おぼろ月コンクリートの中に住む　篠田　純子

梅含む象のはな子の介護食

逃水や外見は仲の良き夫婦

うちそとに脹れるタワー春の宵

佳き話聞く紅梅の日溜に　芝　尚子
早春の電車にどつと小学生
草餅の匂ひて猫の顔を出す
いつもの道いつもの薬いぬふぐり
春一番路地の散歩をよろけさせ
禅寺の東司の外の梅の花　芝宮須磨子
狭い部屋配線あまた春浅し
俳句手帳二月三日の贈物
寒柝を遠くに聞きて湯のけむり　須賀　敏子
冠雪の武甲眩しく遍路道
納税の申告終へて背の軽く
残ること決めてゐるらし春の鴨
庭へくる小鳥の増えて雨水かな　田中　藤穂
映画みて外燈滲む春の街
春の象すずめにも餌をわかちけり
起きて今日二・二六と思ひ出す
踏青や分れし道のまた出会ふ　東　亜　未
風光る三宅島より飛魚来
恋人を抱へるやうに笙ぬくめ
還暦のはな子立ちをり風光る

一句燦々

秋ざくら駅長は即切符切り　多枝子

地方では今でもこの様な風景はあるらしい。駅長が何役もこなすし、その家族も弁当飲み物など売っていた昔を思い出した。コスモスが旅心をそそる。

蕗の薹つつむ新聞株式欄　実

大自然からの恵みは人を和らげ勇気づける。反面世界的不況で株にも影響し生活にも及んでいる。不安感に包まれるが蕗の薹は一筋の光明に。

春一番心の隙間吹き抜ける　　**のりこ**

この句が元気。「心の隙間」共通のもので目を刺し手が出る。春一番の潔さは行方を示唆する如し。

春のその奇抜さに戻りたし　　**典子**

リズムを反らすが、気迫で抑えた。奇抜が作者の念じるところ、俗に言えば好奇心。期待は大きい。

図書館の窓辺明るし水仙花　　**泰江**

良い気分にさせてくれる。図書館の固さ冷たさを中七下五がほごし、ゆっくりした時間が流れる。

香に噎せて人浮かれゐる枝垂梅　　**桂子**

オーバーな出だしが雰囲気を強調して一連から浮上している。案外人間は単純なので引かれ易く彩りには弱い。変な世だから浮かれも必要。

若僧の菜飯のレシピ大擂こぎ　　**寿子**

旧いしきたりに現代語の侵入、違和感が無いのは若さ明るさであろう。若僧はバカにした感がするので青年僧、雛僧にしてもよい。

春花粉感度良好嘘哉　　**理和**

俳人ならではの粋がりは楽しい。漢字固めでもごつごつしない。一生の傑作になりそう。因に春花粉の春音は口を開けた阿吽の阿で最初の意味。杉花粉ではありきたり。

木枯や蒙古斑から生る話　　**恭子**

子供のお尻りを感じる。青々とよく子供の頃銭湯で見たものだ。日本人乳児の九十九・五％とある。木枯で向こうを感じる。この作上下に「ロ」が三個並んだ。気になるのは私だけ。

身いっぱい泣いて熱噴く寒の赤児　　友七

懸命さが伝わる。生きる原点を確と感じる。私何故か刺激と叱咤に聞こえてビタミンのような一句である。「赤児」は「やや」と読んだ。

満開と言ふも梅林淋しかり　　喜久恵

賑やかさの反面の淋しさ。類想はあるが、この作は実感の強さがのり越えた。身に沁みる明暗にも。

自転車の屍累累春一番　　茂登子

私の処、脇に地下鉄駅があるので、この景は慢性的で風に倒れればまさに惨状になる。

寒晴や手渡しされて柩出づ　　じょう

寒中葬りも多くなり気候の変わり目が左右する。人生最後の場面を幾度も見てきた。手を添えたことも度々。改めて人の運命を知るとき。

おぼろ月コンクリートの中に住む　　純子

強い語調で人を捉えるが、この作は神妙である。ここが俳句にしても案外定住の地では無いかと思う。周囲に順応してゆく運命安定感がおぼろ心に。

いつもの道いつもの薬いぬふぐり　　尚子

人生航路確りした歩み、一途さを奏でて止まぬ。「い」の頭韻三つは信念の重なりであり、時折見せる猫の顔が救いのキーワードに。

俳句手帳二月三日の贈物　　須磨子

俳句を頼りとする作者にとって家族の理解励ましは有難い。恐らく花束やケーキも。俳句手帳のアッピールは作者の俳句への傾斜を物語る。

納税の申告終えて背の軽く　　敏子

毎年、重たい思いをするが提出すると一安心。

私、法人だから会計士に頼めば良いのだが顧問料が馬鹿にならず自分で書類を作る。「背の軽く」の気持ちは当事者には良く解る。

起されて今日二・二六と思ひ出す　　藤穂

テレビ新聞では姿を消した。私など毎年小学校々庭の雪景色を思い起こす。心に刺さった二・二六は永遠に。この年、昭和十一年二月一日に私は母を亡した。私十一歳、悲しかったこと尚更に

踏青や分かれし道のまた出会ふ　　東亜未

当然のことなのだが、当然にしないのが詩人の目であり不思議にめぐり合うのが実感の恵みである。「笙ぬくめ」では私今年の節分で神主が同じ仕草をしていた。その時の私の句は「鬼遣らひまた温めて笙の笛」。

あを吟行会のお知らせ

四月　虚子没後５０年記念
子規から虚子へ―近代俳句の夜明け―」

吟行地　神奈川近代文学館
日　時　4月19日（日）午前11時
句会場　未定
申込み〆切　3月14日
申込先　佐藤喜孝　０９０　９８２８４２４４

五月　下町吟行

吟行地　両国近辺
日　時　5月17日（日）
前号でお知らせしました御宿吟行は秋に変更致しました。

二月の句会

傳　中野区　カフェ傳

薄氷やめだかの機嫌うかがひぬ　泰江
針供養絹糸ガス糸躾糸　寿子
掌にのこる水玉春の雪　茂登子
火を埋めて人のぬくもり残る部屋　尚子
寒柝を遠くに聞きて湯のけむり　敏子
福ハ内靴の中にも豆ころぶ　美代子
骨入れて手袋傀儡師めける朝　恭子
地球儀の海がまつさをヒヤシンス　弘子
寒明の波は光を追ってをり　敦子
拝む背に見事な刺繍針供養　裕子
高層の真下の日陰梅の花　綾子
駅までの大気重たき春の宵　純子
目覚めても目覚めきれずに浅き春　典子
顔よりも大きな息や冬帽子　実
水切りの石の行方や氷面鏡　喜久恵
金糸魚を得て夕映の中歩く　藤穂
白梅やむかしむかしの刀傷　喜孝
一月補遺
日向ぼこ話相手が欲しくなり　茂登子

調　さいたま市 岸町公民館

白象に大躯の嘆き涅槃絵図　弘子
梅咲けり猿の腰掛つけしまま　泰江
交番の一輪挿しや冬日さす　慶子
白浪は沖にあるはず春の海　喜孝
「海征かば」兄の遺影へお白酒　寿子
海皆れぬ明日は黄砂来るといふ　藤穂
うららかや海嶺に見入る大人の目　純子
海牛の青や黄色や涅槃西風　敦子
もしもしと人形が言ふ春の夜　綾子

あを吟行会　井の頭公園

還暦の象の孤独よ春の日に　尚子
ものの芽や弁財天の香をまとふ　典子
浮寝鴨こぼして了ふかくし酒　喜孝
はちきれん莟をもちて辛夷立つ　恭子
胸先に鯉の影ある春の鴨　綾子
チューリップ象のはな子に歯のひとつ　純子
咲き初めし山茱萸さびしき景つくる　喜久恵
楪や恩師の庭に垂れてゐし　弘子
大口に春に光をあびる鯉　泰江
風ぬくし天竺鼠膝に抱く　東亜未
還暦の孤独よ春の日に　尚子
春の象雀にも餌をわかちけり　藤穂

七座（ぼくと）句会　中野区・小川苑

花桃や肺いっぱいに外気吸ふ　藤穂
うちそとに膨れるタワー春の宵　純子
白鳥徳利の首に指当つ雨水かな　恭子
子に添はれふるさとの駅雨水かな　須磨子
硝子戸の外をうかがふ室の花　綾子
一膳の炊き立ての飯春の雨　理和
恋人をかかへるごとく笙ぬくめ　東亜未
水に落ち吹かるる木屑雨水かな　木枯
釈迦牟尼の堂外びらき春の雲　喜孝
その障子開けてはならぬ雨水の夜　大佳

連句勉強会　未定
希望者は　佐藤喜孝まで
(090-9828-4244)

傳句会　毎月第2火曜
カフェ傳　森　理和
(03-3368-4263)

調句会　毎月第3金曜
岸町公民館　竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会　毎月第4火曜
小川苑　吉弘恭子
(090-9839-3943)

あとがき

「特別作品」が途切れることなく寄稿されてよろこんでゐる。作品欄の俳号の上の地名を最寄駅またはバス停とお願ひしたところ、快くお書込み頂き感謝。行政区画の地名より生き生きしてゐるやうだ。

『俳句界』（4月号）の清水哲夫の【「悩ましき『歴史的かなづかひ』」】を読む。筆者は

その理由は簡単で、同時代の多くの人々に理解されないかも知れぬ表記法を用いて作品を書いても、無駄だと思ったからだ。これは私のコミュニケーション一般に関わる態度なのであって、同時代の人々に通じないような表記や表現でいくら「名作」を書いても、それはほとんど意味がない。かりに芭蕉や蕪村にわかってもらえるにしても、同時代人一般に理解されなければ、いったい何のための表現なのだろうか。」（圏点喜孝）

つづけて

誤解のないように書いておくが、といって私はゴリゴリの新かな論者ではない。現今の国語審議会とやらのやり方にも、大きな不満を抱いている。そのあたりは戦後いちはやく「歴史的かなづかひ」を擁護した福田恆在の意見に、むしろ賛成なのだ。彼の『私の国語教室』は名著だから、旧かなで格好をつけたい諸君にはぜひ読んでおいてほしい。名著をこのやうな格好をつける目的で薦めるとは恐れ入つた。『私の国語教室』を名著と思つてはゐない人の言だ。

だが一方で戦後の国語改革に伴う新かな表記は現実に生きている。いくら異論を唱えてみても、もはや国民の十割近くがこの表記法を使っている以上、批判は出来ても逆らうことはできない。逆らうだけ無駄なのだ。だとすれば、日本語による表現者は、このいささか頼りない新かなの枠組のなかで、ベストを尽すしか方法はないだろう。俳人もまたそのようにすることで、結束して大衆文

芸としての俳句を盛り上げる方向に力をつくすべきではなかろうか。まずはそこから、本当の意味での俳句普及の道が開けてくるのではないだろうか。」と結論づけてゐる。なぜ〝逆らうだけ無駄なのだ〟らう。長い物には巻かれろといはんばかりである。最後に小沢信男の言をもつて締めくくつてゐる。

「新かな旧かなどちらでもよいが、俳句に旧かなを使ふ人は散文にも旧かなを使うべきだ、筋を通せ」

私は新かな旧かなどちらを選ぶかは各人の思ひがあるであらう。私の旧かなを使用してゐるのは清水氏と同じく簡単で、文語は旧かなでしか書けぬ、といふことだけである。新かなで書くといふことは「や・かな・けり」を捨てると言ふことである。口語で俳句を作ると言ふことである。そこまでは思ひ切れない、それが出来ないからでもある。文語を新かなで表記は出来ない。新かなで文語が書かれてゐるのは見るに耐へない。読む意欲を失つて了ふ。新かな表記を選ぶといふことはまた決断力のいることである。ただ、「国が決めたから」、「みんながさうしてゐるから」「現代的だから」といふ簡単な事柄ではない。文語口語にもふれてほしかつた。

私は使用漢字は可能なら正字を使用してゐる。美しいからである。「あを」会員には仮名遣は旧かな、新かなの別をお聞きしどちらかに統一してゐる。使用漢字、かな送りは原稿を尊重してゐる。

御芳志多謝

木村茂登子　様

藤野　寿子　様

（喜孝）

二〇〇九年四月号

発行日　三月二十九日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244
佐藤喜孝
竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。